

ジョージ・オーウェルの真実

芳賀 智美

(一九九四年度卒・西洋文化史ゼミナール)

はじめに

私はこの論文で、イギリスの作家、ジョージ・オーウェルの真実に迫る。

オーウェルが作家という職業を選んだ動機は何か。また政治的作家となりえたのは、なぜか。この理由は、彼の『エッセイ』『なぜ書くか』に集約されている。彼は幼い頃から文章を書くことが好きで得意であり、「大人になったら物書きになるのだ」という思いは当然であった。そして実際に——一度は道を離れたがこのより道の結果——「物書き」になったのである。

彼は作家が物を書く動機を四つあげている。純然たるエゴイズム、美への情熱、歴史的衝動、政治的目的。彼はもともと前の三つの衝動が強い性格の人間であるが、しかたなく「時事評論家になつてしまった」という。彼が政治的作家になつたのは、彼が生きた時代が平和ではなかったから、つまり戦争と革命の時代であったからである。よって時代が彼を生んだともいえる。だが何よりも彼の精神が、政治的問題を避けることを許さなかったのではないだろうか。

権力に対する怒りが、まず最初に彼に文を書かせた。そしていくつかの段階を経て、彼がとるべき態度は深められ明確になった。それはつまり、権力が権力欲のためにつく嘘を攻撃するという態度である。

ではこうしたオーウェルの立場は、どのような過程を経てはつきりしていったか。また、彼の立場を決定づけたのはどんな時代だったか。これらを具体的に考察することで、彼の真実に迫つてみたい。そこでこの論文を三つにわけよう。

第一章、価値の転換。彼が権力にたちむかっていく作家となつたのには、ある一大転機があった。この章では、彼の考え方の変化の背景について見てみる。

第二章、国家論。彼は、どんな国家を理想とし批判したのか。

第三章ではこれを明らかにし、彼の生きた時代——主に一九三〇年代——の出来事、思想風潮も扱う。

第三章、ベシミズムとポスト冷戦。彼は、彼の時代の現実の中で何に悲観したのか。それはどんな理由からか。この章では以上の事と、冷戦が終わつた現在の変化をとらえる。

第一章 価値の転換

一体何がオーウェルの価値の転換を起こしたのか。それはビルマのインド帝国警察に勤務し、そこで経験したことである。エリック・ブレアーがジョージ・オーウェルという像を描くようになったのは、帝国主義という権威を憎むことから始まったのである。

なぜ彼は、大学へ進学せずビルマの警察官になろうと考えたのか。これには明らかな理由はない。幼い時から物書きになると決めていた彼が、一時的にせよこの考えを捨てようとしたのは不思議である。彼が警察官という職業を、自分にむいていると思っただけではないだろう。推測できるのは次のような事である。進学しなかったのは、彼自身がさほど大学へ行きたいと思っていなかった事もあるが、主にブレアー家の経済的な理由である。彼の成績では奨学金を受けられなかったし、奨学金がなければ大学へ行く余裕はなかった。

ではなぜインド帝国警察という職を選んだのか。当時父親と同じ職業につくことは珍しくなかった。ある意味では中産階級出身者が身を立てるならば、さしあたり植民地以外にはなかったのだろう。また母方の祖母がマンダレーに健在だったという事と、自分が生まれた東洋への郷愁もあっただろう。いずれにせよ、もし彼がイートン校からオックスフォードを経て文学界に入ったならジョージ・オーウェルは生まれなかったことは確かといえる。

ビルマに到着するまでの彼は、帝国支配をどう考えていたのか。帝国支配については、当時の彼にはキップリングからの教養しか

なく、暗い側面については知るよしもなかった。ビルマのマンダレーへむかう船の上で、キップリング的な決意をもっていたかもしれない。彼はのちに『ラドヤード・キップリング』（一九四二年）で、キップリングに高い評価を与えている。それは、キップリングが責任ある態度で政治に対してきたからである。

オーウェルが一九二二年に来たビルマは、どんな状況であったのか。インドで施行されていたモンタギュー・チェルムスフォード改革案がビルマにも適用された。この改革案は、ビルマ人の反帝国主義感情への譲歩案であった。その内容は、自治政府の中で限定された権限と他の小さな改革を含み、選ばれたビルマ人の立法機関が許可される、というものであった。だがその改革案と同時に、イギリス人はビルマを上から支配していた。というのは、イギリスの軍隊と警察とは法律と秩序とに責任をもち、イギリスがこの国の経済拠点を支配していたからである。ビルマへのイギリスの帝國的な支配、つまり白人がアジア人を支配するのは、ビルマに住む西欧人にとって恒久不変で自然な秩序とされていた。

一九歳の青年オーウェルは、この分裂した社会に飛び込み、この生活の五年の間に、帝国主義支配に完全な嫌悪感を抱くようになった。彼が目にした帝国主義支配の実体とは、どんなものがあったか。

彼が警察に勤務していた中で、強烈に心にやきついたある出来事があった。それは絞首刑を目撃したことである。彼は絞首刑を「千回もの殺人より残酷なもの」だと思った。

「留置場を訪れると（たいていの留置場を訪れる人はおなじように感ずるのだが）、私はかならず、自分のいるべき場所は鉄

格子の向こう側ではないかと感じたものだった。」

彼は自分達がやっている事の恐ろしさに苦痛を感じ、刑罰を与える警察という仕事は野蛮だと思つたようになっていた。その上自分達は、外国からの侵略者としてビルマ人を取り締まっている。

彼らは有罪でも無罪でも、専制主義と外国支配体制下で不必要に苦しめられている。こうした事実を直面し、彼は悩まされ続けた。彼はのちのエッセイ『絞首刑』(一九三一年)で、そのむごさを表している。囚人が絞首台にむかう時にふと水たまりをよけたのを、後ろから彼は見た。彼はその瞬間に感じとつた事を次のように記している。

「意識のある一人の健康な人間を殺すというのが……言葉では言いつくせない誤りに気がついたのであった。」

その異様な不安は、それを彼が文字にするまでの十年近く彼を捕らえて離さず、その後も不安は続いた。処刑後の光景は一転する。人種の違う役人達は、冗談をいい緊張をほぐしながら歩き去る。彼らは陽気な雰囲気の中で「原住民もヨーロッパ人の区別もなく、みんなで仲良く飲んだ」。そこは「死んだ男とは、百ヤードしか離れていなかった」。エッセイのこの最後の場面は処刑の残酷さを強調し、また帝国支配の中では皮肉を示す。処刑というショックな出来事でもない限り、白人は現地人達と共感する事はないのである。

では、帝国支配の中の普通の白人の現地人への態度はどうだったのか。『ビルマの日々』(一九三四年)は、彼が自らの体験も生かし、植民地における白人の実態を描いた作品である。ここに表されているのは、南ビルマの一地方のイギリス人社会と、そこで

現地人を搾取し続ける利己的で無知なイギリス人の姿である。ここにはエリスというイギリス人が登場し、彼は東洋人への親しみの素振りを見せるのは恐ろしく邪悪な事と思っており、東洋人に友好的な感情をもつ者を批判する。

「俺たちはここで大昔から奴隷だった黒ん坊たちを支配していることになってるんだぞ。……対等に扱って、お前たち馬鹿はそれで当たり前だと思ってる。」

オーウェルは彼の正義感と白人の意見の間で、毎日引き裂かれる思いだったろう。「ほとんど完全な沈黙が東洋にいるイギリス人全部に課せられていたから」、自分の良心を隠しておかねばならなかった。だがごくたまに、良心を打ち明けイギリス帝国を罵倒し、禁じられた会話を交わす事があった。『ウィガン波止場への道』(一九三七年)にそれがのべられている。話をした後「姦通罪を犯した男女のように、罪の意識にさいなまれながら別れていった。」

彼は警察官として、絞首刑を見た以外にも一つ大きな事件を経験した。これを書いたのが、『象を撃つ』(一九三六年)である。この事件が起きたのはモウルメインにいた頃(一九二六年)で、彼の警官としての地位も上がっていた。この町は反英感情が特に強かった。当時の彼はすでに、「帝国主義は悪だ、今の職はなるべく早く放り出して逃げ出すにかぎる」と決意していた。頭の中では、彼は「完全にビルマ人の味方で、彼らの圧政者である英国の敵」となっていた。だが一方では、ビルマ人の悪質な態度のために彼らとの人間的接触が不可能になっていると思っていた。不本意ながら彼らに敵意を抱いてもいた。この状況で起きた『象を

撃つ」事件とは、どんな事だったのか。

象が暴れ、一人の男が踏み殺された。彼は警察官として銃を持ち象を追う。彼は自分では象を撃つ気はなかった。だが結局「象を撃つ」ことになってしまふまでの彼の感情の変化はなぜ、どのように起こったのか。象はすでに気が静まり、のんびり草を食べていた。この時彼は「撃つべきではない、と確信した」。彼は象をこのままにし、象使いを待つ決心した。だが彼の後ろには、二千人近い有色人種の群衆が集まっていた。彼らは何かを白人に期待している。その時彼は「撃たないわけにはいかない」と悟った。つまり、支配する白人の立場について悟ったという事である。それは空虚なものであった。支配する白人は「原住民」を感心させ、「原住民」の期待に答えなくてはならない。

「旦那は旦那らしく動かなくてはならぬ。……わたしの生活のすべては、いや東洋にいる白人の生活のすべては、ひたすら嘲られまいがための戦いであつたのである。」

つまりなぜ象を撃つたかという、彼は自分の身だけでなく白人支配の神秘のそのものを守ろうとしたのである。そして白人の支配者としての感情に屈してしまうことが、「帝国主義の本質——つまり専制政府を動かす真の動機」の一部となっている。これが彼がこのエッセイで言いたい事であつた。

専制支配の一役を担ってしまったオーウェルには、強い罪の意識が付きまとう事になった。この結果彼の考え方はどんな方向にむかったのか。彼は全てを「被抑圧者はたえず正しく、抑圧者はたえずまちがっている」と理論づけるようになった。五年も帝国主義的支配の中で最も権力的な手先として働いてきた彼は、その

罪を償うため次のように決意する。

「私は、帝国主義からのがれるばかりでなく、人間が人間を支配するあらゆる形態からのがれなくてはならない、と感じていた。身を潜め被抑圧者のなかに降りて行き、彼らの一員となり、彼らの側にたつて圧政者とたたかいたい、と私は思った。」

こうしてイギリスに帰国してから彼は、その被抑圧者つまり労働者階級の中に入つていった。階級のない社会が彼の理想となつた。

オーウェルはビルマの生活で多くのディレンマに直面し、一九二七年に休暇で帰国した時辞職を決心した。のちに、辞職した主な理由として「それ以上帝国主義に奉仕できないと思つたことであつた」⁽⁵⁾、「帝国主義を「大まかにいって一つのペテン」としか思えなくなつた。」とのべている。

これは一体どんな「ペテン」だつたのか。理論的には帝国主義は、植民地を保護し秩序を与える事になっている。だがもし専制主義がそれを受ける側のために何かの役立つたとしても、被抑圧者は割に合わない支配を受ける。その上抑圧者は保護を建前とするが、実際は抑圧者自らの利益を目指している。彼はこうした事をペテンとよんだ。

ビルマの日々により彼は帝国主義を憎むようになった。彼の「価値の転換」は一言でいえば、「全ての支配は悪である」と考えるようになった事である。彼はあらゆる専制支配に批判を展開していった。そして彼は再びペテンをスペインで見る。それは彼が経験した中で、最も恐ろしいペテンであつた。

第二章 国家論

スペインの「ペテン」とは、ソ連によるものである。これはオーウェルにどんな影響を与えたのか。彼はこの経験によって現実の国家体制を理解し、憎むべき国家を明らかにしていたのである。一方で彼は「ペテン」を見る直前に同じスペインで、すばらしい経験をした。ここで見た社会が、彼が考える国家の理想像の原型となったのである。

彼にとってスペイン内戦は、その後の彼の立場を決定づけた重大な出来事であった。そこでスペイン内戦の動向を簡単に追ってみる。スペイン内戦は、彼が参加しようとした時はどんな状況に見える、なぜ参加したのか。一九三六年七月、反政府軍をおこしスペイン内戦が勃発した。人民に選ばれた共和政府とファシスト勢力フランコの戦いであった。フランコはドイツとイタリアから軍事的援助をうけた。共和政府には共産党員が入閣していて、ソ連から武器の援助をうけるようになった。だがイギリスとフランスは、「不干渉」という偽善的な政策をとった。このため知識人の間に、反ファシストの抗議行動がうまれた。民主主義が独裁者の前で後退するように思え、今はスペインで民主主義のために戦えると思えた。共和国を救おう、あるいは革命を前進させようという願望が、多くのイギリス左翼にわきおこった。オーウェルも理想に燃えていた。彼は「ファシストと戦うために」スペインにむかったのである。だが実際、彼はそこで何を見ることになったのか。それは「理想」と「現実」の世界である。

まずオーウェルが目にしたのは、彼が理想とする社会である。

彼は、I L P（独立労働党）の姉妹政党であるP O U M民兵部隊に参加した。最初にバルセロナについていた時、彼はこの町のとりこになった。その時こは労働者が権力を握っており、革命的雰囲気包まれていたからである。革命と未来に対する信頼があり、平等と自由の時代が訪れたのだという気持ちがあった。人間は資本家の機械の歯車ではなく、人間として振る舞おうとしていた。この町を見たときの彼の感激は、「ファシストと戦うために」という同じ意志によって結ばれた同志とすることで深められた。そして彼らの属するP O U M民兵部隊は、「階級なき社会の生きた見本」といえた。

「将官から一兵卒にいたるまで同じ給料をうけとり、同じ食事を取り、同じ服を着て、完全に平等な条件でつきあ⁽⁸⁾った。」オーウェルは、のちにシ ril・コノリーへの手紙で「すばらしいものを見て、……社会主義を……ほんとうに……信じるようになりました」と書いている。「すばらしいもの」とは、こうした平等な人間関係をさしていたに違いない。彼はずっと求めていた勤者との平等な関係に基づく無階級の社会を、初めて経験することができたのである。

だがこの後彼は、「現実」の政治を見ることになった。それは、新しい現代の政治的階級ともいえる、党の少数エリートによる独裁の姿である。以前に彼は、社会的に組織化された階級制度をイギリスやビルマで見た。それにかわり党の少数エリートによる独裁の姿が、彼の後の小説の中に現れるようになる。スペイン内戦が始まった時、階級は次のようにわかれた。これまでの支配階級はファシスト側についていた。一方労働者は共和国政府側につき、階

級差別がない社会をつくらうとした。カタロニアでは労働者革命といえるものもおこっていた。だが革命は、常に新しい支配階級を生みだす。スペインの場合でも、「ファシストに対抗して戦いを効果的に進めるため」には軍の中に階級制を導入し規律を強化すべきだ、という主張がすぐ現れた。そしてソ連との関係で、共産党が共和国内で権力を握るようになっていた。共産党は戦力を強めるために、まだ残っていた有産階級に訴える反革命的路線をとるようになる。この結果階級が三重に復活する。軍事面では高級将校団が形成される。政治面では共産党とその秘密警察がエリート支配階級となる。社会面では中産階級が復活し、経済的不平等も復活する。だがより恐ろしいことが、政治面で起こりつつあった。全体主義国家では常に、内部の異端者をまず排除することになっている。スペインの場合も同様で、共産党はPOUMという異端的マルクス主義者を、言葉による中傷と力による弾圧により消そうとしていた。一九三七年五月バルセロナで、共産党と警察の側と、アナキストとPOUMの側との間の戦いが起きた。それに続いてPOUMは徹底的に弾圧され、党员と党の支持者は命を狙われる。オーウェルは数日間逃げ回りやっとスペインを脱出した。彼はバルセロナで追われていた時、全体主義警察のやり口を知った。また、一九三七年の五月と六月にカタロニアで起こった事について共産党がいつている事を彼が後で調べた結果、全体主義がどう歴史をゆがめるかを知った。彼がいうようにその時から彼の真面目な著作は全て、ある意味で全体主義に反対し、彼の信じる民主的な社会主義に味方して書かれた。そして彼がどんな国家を憎み、どんな国家を求めたかが明らかになってくる。

まず理想から見てみたい。オーウェルの理想は、彼が民主的社會主義と考える物が存在する国家である。彼が考える民主的社會主義とはどんなものか。彼が常に求めていたのは、POUM民兵部隊で見られたような階級のない平等な社会である。こうした社会は、もちろん国家社会主義によるものではない。社会主義者としての彼がスペイン内戦以後に力を傾けたのは、国家社会主義に対する批判である。国家主義と社会主義との結び付きが、彼にとって現代の社会主義を腐敗させる最も大きな力に見えた。彼が批判した国家体制についてはまた後で詳しのべることにする。

では国家主義体制に対抗できるものは何かというところ、彼のいう「愛国心」である。それはどんなものか。「ナショナリズムについて」(一九四五年)によれば、自分と関係ある(必ずそこに住んでいなくともいいが)、ある地域と生活様式に対する愛情である。でもそれを他人に押しつけようとはしない。愛国心は軍事的また文化的な意味でも、もともと防衛的な物であるという。彼は、この「愛国心」とナショナリズムを注意深く区別した。愛国心に対してナショナリズムは、権力欲と切り離すことができない。愛国心という言葉は、日本語では国という文字が間に入るので具合が悪いが、元はパトリオティズムである。つまり同じ土地に住む仲間への愛をさす。彼は自分達の生まれた国土は、紳士層と上流中間階級の物でなく、普通の人々の物であると考えていた。そして普通の人々がもっている仲間への愛(パトリオティズム)を、国家主義体制に対立できる物の一つとした。

オーウェルの愛国者としての心情は、彼のエッセイ『右であれ左であれ、わが祖国』(一九四〇年)によく表されている。彼は

第二次大戦の始まる直前までは、次の戦争は植民地市場争奪の資本主義の闘争にすぎないから反対すべきだと主張していた。だがいよいよ開戦となると、彼は次のように宣言する。

「私は心の底では愛国者なのであって、味方を妨害したり裏切ったりはしないだろうし、戦争を支持するだろう、できれば自ら戦いもするだろう、ということである。……イギリス政府はチェンバレン内閣であっても、私の忠誠心を確保した。」

彼は欠点の多いイギリスをともかく守ろう、という祖国愛をもっていたのである。

オーウェルの愛国心にあふれた作品となったのが、『ライオンと一角獣』（一九四一年）である。彼はこの作品で愛国心、イギリスの民族性、来るべきイギリス革命についての意見をのべている。彼はイギリスの美点として、特にイギリス人の温和さを強調する。他には、個人的であることやいくつかの大衆文化をあげている。そしてそれらが、大英帝国の独裁的支配を維持しながらも国内で民主主義を唱えたりするといったイギリス人の偽善性に抵抗している。だがその温和さ、個人主義にもかかわらず、「太陽の下でもっとも階級に支配され……もっぱら年老いたばかりな人々に支配された国」であった。だが支配階級が衰えたからといい、他の国のように革命やファシズムとかに墮落することはなかった。彼は、愛国心が免疫になっているのは知識人層だということ。だが当時のイギリス知識人はどうだったか。彼らは平和主義だったり親露的だったりした。いづれにしても常に反英的な見方を広めようとしてきた。彼は、「愛国心と知性は、再び一致しなければならなくなるであろう。」とのべている。イギリスの支配階級の腐敗

は増々進行している。この支配階級は、無力、迷妄、間違ったことをやる天才の才能」ゆえに国家の脅威となっている。こんな者が国を預かっている限り、戦争に勝つなど疑わしいのであった。彼は、この戦争は社会革命を通じて初めて勝つことができ、「イギリス人民が自由になることができるのは、革命によってだけである」という。彼は、革命とはいえないまでも何かが起こりつつあると感じていた。この何かは一九四五年の労働党選挙戦で常識となったが、それ以前に陸軍の一般兵士や民間防衛の活動家の意識にすでに刻まれていた。戦争遂行の努力を通じて計画は可能で、共通の善のために役立つ事ができ、基本的自由を脅かす物でもないことが証明されていた。戦前、計画の可能性を信じていなかった人々も、今では実際に大規模な計画に参加しかなりの成果をおさめていた。「戦争は、……各個人にたいして彼がまるきり一個人である訳ではないことを明らかにする。」こうして彼は福祉国家のもう一つの冷静な常識になった事——社会の変革は、自由党のアスキス首相と労働党アトリー首相の指導力よりも二つの大戦による所が大きい事を、最初にのべたのである。彼は中間層の大衆、普通の人々の愛国心に期待していた。彼らは「多分我々の側につくであろう……愛国心は結局階級の憎悪よりも強いがゆえに、多数者の意志がかつ可能性がある」と彼はいう。またまじめに論じられる社会主義政党は労働党だけだとべ、社会主義に向けての戦時の計画を提訴した。彼は最後に、イギリスで真に社会主義的な政府が権力を握ればどうなるかのべた。それは「国民をすっかり変えてしまうであろう」だが「独自の文明をまがうかたなき特徴を……もち続ける」事であろう。

「産業は国有化し、所得格差を制限し、階級的差別のない制度を樹立するであろう。……それは大英帝国の解体をめざすのではなく、それを社会主義諸国の連邦に改造させることをめざし……その戦争戦略は、いかなる資本主義国の戦略とも全く異なったものになるであろう。というのは、現在の体制が打倒されたときの革命的余波を恐れる必要がないからである。」

彼の価値観は実現できたかできなかったかに関係なく、平明にのべられている。「私は英国を信じられわれが前進することを信じる」と、彼は『ライオンと一角獣』を結んだ。

結論として、彼の理想の国家を一言で表すと次のようにいえる。つまり仲間への愛を意味する愛国心をもつ普通の人々によって、自由で平等な社会が構成されている国家である。

ではオーウェルは、この理想的な国家に對置されるどんな国家を憎んだのか。彼が反対したのは、右であれ左であれ、一党独裁のうえになりたっている全体主義的国家である。

彼が全体主義という観念を構想するようになったのは、スペインから脱出してまもなくであった。スペインでソ連がオーウェルたちにしたことにより、彼は全体主義的な共産主義の性質を知った。社会主義を掲げて始まったソ連は、社会主義を裏切ったのである。ソ連は「ファシズム打倒」の看板も掲げていた。だがソ連が社会を動員する方法は、ナチス・ドイツやイタリアの方法と根は同じ物だったのである。スペイン内戦によって、彼はソ連の政治機構について考えてゆくこととなった。スペインから帰国して六年後に、それは寓話の形式で『動物農場』に表された。彼はこの作品の一九四七年のウクライナ語版の序文で、社会主義運動の復活

のためには、ソビエト神話の破壊が決定的に必要なと、べている。では「ソビエト神話」は、どのように成立したのか。「ソビエト神話」は一九三〇年代、イギリスの多くの左翼知識人に信じられていた。オーウェルは『鯨の腹の中で』（一九四〇年）で、次のようにのべている。

「一九三五年から一九三九年にかけては、四〇歳以下の作家にとって共産党はほとんど抗しがたい魅力をもっていた。」

一九三五年から一九三九年までというのはつまり反ファシズムと人民戦線の時代、レフト・ブック・クラブの全盛時代であった。ソ連の文化政策が、ナチの野蛮からヨーロッパ文化を擁護するというスローガンを掲げていたからである。そしてスターリンの指示に基づく作家や芸術家の組織化が、左翼知識人にさらに影響を与えた。この状況下で成功したのが、レフト・ブック・クラブであった。これは、一九三六年の初期にヴィクター・ゴランツが始めた出版事業である。クラブのために本を選ぶゴランツの間は、政治学者のハロルド・ラスキと、左翼の作家のジョン・ストレイチーであった。毎月レフト・ブック・クラブは、ほぼ正統的な共産党支持路線にそった反ファシズムの本を、一、二冊発行した。そしてその本を廉価版で五万部ほど、会員に配布した。こうして共産主義者とそれに近い人々は、世論をつくりだすのに大きな影響力をもつようになっていった。だからオーウェルがスペイン内戦のソ連のベテンを明らかにしようとすると、政治に参加した知識人たちに非難の対象とされることになったのである。彼は『カタロニア讃歌』で、ソ連のスペイン介入政策とこれに迎合するス

ペイン共産党を厳しく批判した。ゴランツはテーマを聞いただけでオーウェルからの出版の申し出を断った。その理由は、「ソ連に對し人々に不信感をもたせる本は出せない」というものであった。ナチス・ドイツに對抗する同盟のためにソ連への人々の信頼をなくすまねはできないとする主張は、ゴランツ一人のものではなかった。反ファシズムという大義のためにソ連批判を控えるのは、左翼進歩派論壇の常識であった。『ニュー・ステーツマン』誌に提出されたオーウェルのスペイン内戦の記事は、その雑誌の編集長キングズリー・マーティンにすぐ断られた。『ニュー・ステーツマン』誌は、一九三〇年代を通じてイギリスでさらには世界規模で、左翼論壇に君臨した週刊誌である。多くのイギリス左翼知識人は「反ファシズム」のためならば、事実や歴史が歪められる事さえ承認したのである。¹²⁾

ところで、ナチ御用学者のレットテルをはられたカール・シュミットによれば、政治の本質は「友と敵」の存在につきまとい。イギリス左翼知識人たちの動きもまさに、「我が敵の敵は我が友」という考えに基づくものである。ナチズム、ファシズムという敵と戦うためには、ドイツと潜在的に敵対關係にたつソ連や、そのソ連を支持する共産党への批判を抑え、友として支えたのであった。ファシズムをとにかく悪とする知識人は、スターリンへの奴隸的崇拜は全く間違っていないと考える。だが彼らは実はヒットラーやムッソリーニに忠誠を誓う人と、何も変わらないとオーウェルはいう。多くの知識人は、権力を崇拜し成功した残虐行為を賛えていることになる。オーウェルはこの権力崇拜が、「残虐行為や悪そのものを愛することになる傾向を注意する必要がある

る」とのべている。

『目的は手段を正当化する』が、往々にして『徹底的にひどい手段なら、その手段そのものを正当と見てよい』ということにもなってしまうのだ。¹³⁾

だが彼にとつて全体主義の最も恐ろしい所は、「残虐行為」そのものではなかった。全体主義の眞の恐怖は、「客觀的眞実という概念を攻撃すること」にあったのである。彼は、『ナショナリズムについて』（一九四五年）で、左翼知識人のように自分を埋没させる対象として選んだ国家や組織のために、権力を手に入れようとする人々をナショナリストとよんだ。そして彼らのもつ感情を「ナショナリズム」という言葉にあてはめた。イギリス知識人の場合は共産主義である。彼らはソ連を祖国と見なし、ソ連の政策は絶対に正しいものとしてその利益をはかることを自分の義務としたのである。ナショナリストは、敵の残虐行為にはこぞとばかりに攻撃する。だが味方の残虐行為は、非難しないだけでなく、事実であることを認めず無視するのである。イギリス左翼知識人はドイツの強制収容所をもっとも声高に弾劾したが、ソ連にも強制収容所があることはほとんど知らない（ふりをした）。何百万という餓死者が出た一九三三年のウクライナの飢饉のような大事件でさえ、彼らの多くは気づかなかつた（ふりをした）。

「たとえ、……理性的には正しくないことを認めたとしても——これは間違いだと感じることができないのだ。」¹⁴⁾

「ナショナリスチックな愛憎の念——友敵思考ともいえる——」を取り除くためには、どうすればいいか。政治行動にはこの感情はつきものである。またこの二〇世紀という時代は、——国家が

大きな力で人々を動かす時代となったのだが——政治に無関心ではいけないのであった。この時代では、「ナシヨナリスチックな愛憎（『友敵』）の感情を避けることは難しいだろう。だがオーウエルは、少なくともこれに抵抗することは可能だという。まず自分にそういう感情のある事を認める。そうすれば、その感情が自分の考えを歪めるのを防げるはずだと彼はのべている。また現実を認識することも、感情的な衝動に対処する方法としてあげられている。とはいえ、このためには「道徳的努力」が必要とされるのである。彼は『ナシヨナリズムについて』の最後を、次のような文章で結んでいる。

「現代の英文学が今日のさまざまな大問題を反映していると思えば、この（道徳的）努力を払う覚悟のある人間がいかに少ないかがよくわかるのである。」¹⁵

この文章は、彼のどんな気もちを表しているか。全体主義国家、またそれに動員されていく人々の意識の状況を、彼はどんなまなざしで見つめていたのか。そしてこの世界の行く末について、どう考えていたのであろう。

第三章 ペシニズムとポスト冷戦

まず第二章の最後の問いに答えたい。オーウエルのまなざしは、全体主義的な傾向が弱くなる様子がない中、悲観的なものとなっていた。一方、わたしたちが生きている今は、冷戦の集結とともに全体主義体制が崩れていく時代となった。

彼は一九四四年二月『動物農場』を完成させた。ここでの彼の政治的目的は、全体主義の打倒であった。彼はこの作品を、「ど

んな読者にも理解できるように、そして外国語に容易に翻訳できるように「物語」として書いた。それによって世界中の一人でも多くの人々に、ソ連の不可謬性という神話の迷妄を理解させようとした。『動物農場』はロシア革命から多くのエピソードを引いている。だが彼はそれだけでなく、時代の予測をし読者へ警告を与えている。例えばジョーンズと彼の輩下が豚たちと夕食を食べる最後の場面は、和解ではなくて反目を示すことを意図していた。彼はそれをテヘラン会談直後に書いた。それはソ連と西側間に考えうる最善の関係を確立したと、誰もが思っていた。彼自身は、良好な関係は長続きするとは信じていなかった。事実、テヘラン会談、ヤルタ会談で、世界は超大国のあいだに分割され、ついで超大国は反目するようになったのである。この本の出版は、たてつけに出版社に断られた。同盟国であるソ連への世間一般の常識は、無批判な礼賛だった。政府の宣伝はつい先頃までは「ヒットラーと同盟しただまされやすいボルシェヴィキたち」が、今や「英雄的なロシア人民」へと変化した。多くの人々には、ロシアの肅正、ヒットラーとの間でポーランド、バルト諸国を分割したことなどの悪い記憶は、宣伝によって忘れられたようであった。スターリンが全体主義者であることと彼の犯罪を、民衆に思い起こさせることは見当外れであり、不謹慎なことだったのである。だがオーウエルの『動物農場』における目的の中心は、過去の罪や戦時の同盟国の行為を攻撃することでもなかった。彼はむしろ人々の心からきまり文句と権力崇拜を取り除き未来に対し人々を用心させておこうとしたのである。彼は、未来は一層全体主義の脅威にさらされていると考えていた。平凡な事実を語ったために

出版する際に迫害をうけた彼は、イギリス知識人に対する批評としての、次の名言をうみだした。

「もし自由になんらかの意味があるとすれば、それは相手が聞きたがらないことを相手に告げる権利をさすのである。」

スペイン内戦の事実を暴露しようとした時も、彼は出版拒否という同じ目にあつた。だが今やソ連を批判するのは、非難の対象になるだけでなく、批判が存在するという事実さえ黙殺されてしまふ恐れがあつたのである。彼は「ソビエト礼賛」はそのうちに終わり、『動物農場』が出版される頃には、彼の見解は認められているだろうと見ている。だが彼はその事に対しては、重要視していない。

「一つの正統思想からまたつぎの正統思想に変わつてみたところ、かならずしも進歩したことにならないのだ。」

彼が最も危険を感じていたのは、その時の正統思想にのっとり事実を歪曲したり、異端とされる発言の自由を奪うといった全体主義的な方法が、奨励され続けることだつた。

もし全体主義的な考え方が永続し全体主義国家がさらに拡張していくならば、世界はどうなるか。彼は全体主義国家の最悪の可能性を、『一九八四年』（一九四九年）に寓意的な警告として描きだした。彼は、自分の周りにすでに「一九八四年」のような恐るべき新世界を思わせるものがあると見ていた。『一九八四年』を書く四、五年前あたりから彼のエッセイには、世界的に政治的・道義的低下が進み、その一環として歴史と言葉とが歪められつつあるとのべられている。また、国際関係についての悲観的な見方も現れている。

オーウェルが期待していた社会主義に対する思いは、どう変化していったのか。彼は、社会主義を理論よりも伝統と常識的徳に基礎づけようとしていった。一九四六年一月、彼は社会主義についての一連の本について、『マンチェスター・イヴニング・ニュース』紙の書評を書いた。彼は次のように問いかけた。「戦争、犯罪、病氣、貧困、過労」を廃止したいという希望を含んだ「人間の同胞愛」という古い思想は放棄されたのか。それは経済的な安定とひきかえに個人的権利を差し出してしまうような「新しいカースト社会」にとつて代わられたのか。後者を彼はソ連流の方法とみていた。彼は社会主義者はどうあればいいかのべている。社会主義者は人間社会は完全なものにできると信じる必要はない。今の社会よりよいものにでき、人間が行う多くの悪は不正と不平等が歪んで現れた結果だと信じさえすればよい。彼は社会主義の基礎は人間主義だとした。一九四八年十月の『コメンタリー誌』の「生き残るためのイギリスの闘争」という論文から読みとれるオーウェルの展望は、次のようなものである。社会主義の達成は、かつて彼が考えていたよりも長期の過程になるだろう。労働党政権は、たとえ短期的にせよ戦時中に全社会に発生した平等主義的倫理を固め広めていく機会を逃した。今では多くを再び始めからやり直さなければならぬであろう。彼は『ライオンと一角獣』で、イギリス革命が間近に迫っていると信じていた。その頃彼が見ていた夢と比べると、彼の社会主義に対する希望は、強いものではなくなつていた。

現実の世界の状況から想像できうとしたオーウェルの展望は、どんなものであつたか。それはいくつかのエッセイや『一九八四

年』に示されている。もし全体主義社会が永続的に存在することになったら、真理の偽造はどんなものになるか。彼の考える社会では常識は、日常生活と科学者だけで通用している。だが政治家、歴史家、社会学者には無視されることになる。科学の教科書を歪曲するのは間違いいではないかと思っっている人々がすでにしていることから、彼は予想しているのであった。

原爆の影響についてはオーウェルはどう考えていたか。彼は原爆を使わないという暗黙の協定が結ばれると考えている。そのような世界状況の最悪の可能性はどうなるか。彼が想像するには、世界が二、三の広大な超大国に分割される。超大国は互いに他を征服できず、また内部の反乱によっても転覆できない。その世界の構造は、神のようなカーストが頂点に奴隷が底辺におかれる。自由の破壊は、世界がそれまで知っていた程度を越える。こうした世界は全体主義社会の最悪の可能性を予想したものといえ、オーウェルの展望は悲観的なものである。彼は『一九八四年』で、権力に飢えた知識人エリートが永久に権力につけておくことを唯一の目的として共産主義とナチズムの手法を合わせた政治体制が、どんなものになるかを表した。彼は現実には全体主義的思想が知識人の間に根を下ろしていると考え、彼らに対して悲観的であった。

二〇世紀を振り返ってみると、ナショナリズムという感情による大衆動員の時代であった。この動きの指導的地位に立つのは、知識人であった。特に一九三〇年代のヨーロッパで、知識人の動員・組織化は急進的なものとなったのである。この時代にはファシズムと民主主義が対立していた。「ファシズムに抵抗する」としたソ連共産主義は、知識人たちにとって敵の敵であるから友と

なり、彼らはその権力に自ら進んで服従することとなった。特定の敵を選んで攻撃し、それ以外のいわば味方の陣営には対立がないと信じさせる方法はナチズムと同じであると、オーウェルは考えた。そのような全体主義は、対立の生じうる全ての社会組織や言論・思想などの自由を抑圧し一党制の独裁をしく。彼は全体主義国家が永久に存在していくとどうなるか想像し、警告を与えた。彼はまた、イデオロギー論に走り全体主義に追従する知識人に失望した。

今やソ連が崩壊し、東西冷戦構造は終結し、国家間におけるイデオロギーを大義とする戦いの図式は消滅している。イデオロギーの覆いがとれた現在の世界では、「我が敵の敵は我が友」という思考は通用しない。「友敵」の考え方によって、権力を維持し拡大しようとする全体主義国家は存在しえない。国家に個人がのみこまれていくことはありえない時代となったのである。

大衆・知識人の動員の時代、「友敵」の時代であった二〇世紀は終わろうとしている。今後は、脱国家が必要とされる時代となっていく。もしオーウェルが、この今の世界を目にしたならばどんな感想をもらしただろう。

おわりに

オーウェルは、ビルマで「専制的な統治体制」を経験した。このことが、彼の考え方を最初に一転させた。その後彼は、一九三〇年代、四〇年代のヨーロッパ政治の長い旅を経験した。この経験によって彼は、「全体主義的統治」は人類にとってより大きな脅威であることを理解し、恐れるようになったのである。全体主

義権力を攻撃することが、彼の大きなテーマの一つとなった。

全体主義の一つの特徴は、「真実を歪曲する」ことである。これは、権力者の、権力を維持し拡張するためにはどんな事でもするという性格によるものである。オーウェルが歴史の事実を変えられていく様子を初めに見たのが、スペイン内戦であった。それは、ソ連によるベテンであった。政治的ベテンが特に横行した時代に、まさに彼は生きたのである。この「ベテン」の源はどこか。それは「友と敵」という心理から発せられるのである。政治に必然的となるのは、敵を少なくし味方を集め権力を握る事である。この「友敵」思考によって事実を無視しイデオロギー論に走ることになり、ペテン、建前論、偽善といったものが付随してくる。彼はこうした政治の不毛さを指摘し、実体を暴いていったのである。

彼は常に借りもののイデオロギーではなく、自分自身のはだけ目の目で物事を判断した。だが、その時世間の常識となっている正統思想に反する彼の意見は抑圧される。その中で彼は、異論の存在する自由を主張した。全体主義的な考え方は、真実を歪め、自由を奪う。

オーウェルが最もいいたかったことの一つは、「全体主義的統治」は、人類を制約するだけでなく最悪の事態となれば人類を破滅させかねない、という点である。彼はもし全体主義が私たちの普通の生活様式になったならば、人間的な価値、つまり愛情や正義といったものは滅ぼされてしまうだろうと考えた。

全体主義が人々の周りをとり囲みつつあると思われた中で、彼は全く希望を失っていたのか。知識人階級には悲観的であった。だが普通の人々には望みをもち続けていたのである。彼は、普通

の人々に残されている「真の人間らしさ」(decenty)によって未来を切り開いて行くことに期待した。この希望の実現がいかに難しいか、彼自身知っていた。にもかかわらず彼は、普通の人々の品位と寛容と人間性を信頼し、それによって権力の追求ではなく、社会を戦いとることを価値あるものとしたのである。イデオロギーだけが優先し人間が抹殺されることのある世界で、彼は人間性を無視することはなかった。

オーウェルが人生の中で求めていた核心とは、一体何か。彼は人生でも著作でも、彼の生きている時代とその後の時代のディレンマを表していた。そのディレンマとは、ナチズムとスターリニズムと二つの世界大戦と核兵器競争とによって、人類の進歩を樂觀的に信じる時代はすでに終わったということであった。この時代のディレンマの中で、押し寄せてくる問題を処理するためにできることは人間らしさをもつことだと彼は知っていた。ここに彼の才能があったのである。彼が私たちに遺した「真の人間らしさ」とは何かという問いを、私は心にとめておきたい。彼の問いかけは、今の時代こそ必要とされるものなのである。

〔注〕

(1) ジョージ・オーウェル『ウィガン波止場への道』土屋宏之訳(ありえす書房、一九八二年)一六〇頁。

(2) ジョージ・オーウェル『オーウェル評論集』小野寺健編訳(岩波書店、岩波文庫、一九八三年)二二八頁。

(3) ジョージ・オーウェル『ビルマの日々』宮本靖介、土井一宏訳(晶文社、一九八四年)三一―三二頁。

- (4) オウエル、前掲『ウィガン波止場への道』一五九頁。
 (5) オウエル、前掲『評論集』四二頁。
 (6) オウエル、前掲『ウィガン波止場への道』一六二頁。
 (7) ジョージ・オウエル『オウエル著作集Ⅱ』鮎沢乘光、上田和夫、小野協一、小池滋、佐野晃、鈴木建三、橋口稔、平野敬一訳(平凡社、一九七〇年)二二頁。
 (8) ジョージ・オウエル『カタロニア讃歌』都築忠七訳(岩波書店、岩波文庫、一九九二年)四七頁。
 (9) オウエル、前掲『オウエル著作集Ⅰ』井上麻耶子、鶴見俊輔、宇田佳正、塩沢由典、小野修、長沼節夫、横山貞子、石山幸基訳五〇六〜五〇七頁。
 (10) オウエル、前掲『オウエル著作集Ⅱ』九七〜九八頁。
 (11) オウエル、前掲『オウエル評論集』一八五頁。
 (12) レフト・ブック・クラブが左翼知識人論壇とオウエルの関係については水谷三公『ラスキとその仲間―赤い三〇年代―の知識人』(中央公論社、一九九四年)が適確に論じている。
- (13) 前掲『オウエル評論集』二五二頁。
 (14) 同『オウエル評論集』三四〇頁。
 (15) 同『オウエル評論集』三四二頁。
 (16) 同『オウエル評論集』三六一頁。
 (17) 同『オウエル評論集』三五九頁。
 (18) バーナード・クリック『ジョージ・オウエル下』河合秀和訳(岩波書店、一九八三年)二六一頁。
 (19) クリック、前掲書、三〇六頁。

コメント

大江一道

本論文は、若干の修正以外は芳賀智美さんの卒業論文そのままである。芳賀さんたちが本学に入学した一九九一年に旧ソ連は滅びた。私が一九九二年度の講義西洋文化史で扱ったユートピア思想の歴史では、最初にG・オウエルの『一九八四年』をとりあげた。しかし芳賀さんは、前年にこの科目は履習して受講しなかった。一九九四年度の演習Ⅱでは、一九三〇年代のヨーロッパ、とくにイギリスの外交と経済・社会を中心に研究した。この演習に触発されて生まれたのがこの論文であるとは本人の弁である。同年春に、水谷三公氏の鋭利な三〇年代知識人批判の著作が出版されたことも参考になったろう。

論文は、短いながら問題意識は明瞭であり、三章の構成も適切である。問いを発しそれを解明していくという文体は、リズムがとれて小気味よいとおもう。

オウエルは眼の人であった。ビルマで、ロンドンで、バルセロナで、帝国主義と全体主義が自由を抑圧する時代を、その澄んだ鋭い眼光でとらえた。「赤い三〇代」の知識人の偽善も容赦しなかった。スペイン内戦で銃をとったオウエルに匹敵できる同時代の日本の左翼知識人は一人もない。

そのオウエルの全体の主義批判の射程は、ソ連党国家が解体した現在と未来にものびるだろうか。この難かしい問いに芳賀さんも答えようとしているが、その姿勢は貴重である。狂気と幻想がはびこった二十世紀の混迷は、まだ終わってはいない。